1 堆肥が変わり、野菜がおいしく元気に

■ こんなに皮が薄く甘いキュウリは、はじめて

「品質のよい堆肥に変えて5、6年、キュウリの味も育ちもグーンとよくなった」と喜ぶのは、夏冬キュウリの名産地、福島県二本松市の和田健一さん。食べた人が、「こんなに皮が薄くてパリッと歯切れがよく、甘いキュウリははじめて」とほめてくれるほどです。

キュウリがグーンとおいしくなった、二本松市の和田健一さん

和田さんにとって、何よりうれしいのは、キュウリの樹が強くなったこと。葉が小ぶりで肉厚に変わり、それとともに病気が減ってきたのです（右の写真）。

以前にも、キュウリ栽培の安定のためには堆肥施用が必要といわれ、多い年には10aに8tもの堆肥を入れてきました。ところが、堆肥中の家畜糞などがじゅうぶん分解されておらず、また窒素成分などが濃いため、葉が大きく緑色が濃く、軟弱な育ちになっていました。そのために、梅雨時から夏の収穫が本格化する頃になると、べと病やうどんこ病に悩まされていました。

葉が小ぶりで厚くしっかりしてきた

■ 堆肥がちがうと

現在和田さんが使っているのは、福島県大玉村で肉牛の多頭飼育を行ない、堆肥工場をもって、地域の資源リサイクルを行なう國分農場の堆肥。肉牛舎から出る牛糞・オガクズ・モミガラの混合物と、地域の生ゴミとを主原料としてつくられた熟成堆肥です。

國分農場の堆肥は、微生物による高温発酵がすすむ1次発酵に3週間、その後暗所で微生物による